

令和元年度 第1回 横浜市地域包括支援センター運営協議会 議事要旨

日時	令和元年7月11日(木) 午後3時00分から午後4時00分まで
場所	神奈川産業振興センター 13階 第1・第2会議室
出席者	山崎会長、延命委員、大竹委員、小倉委員、小園委員、小林委員、佐藤委員、武安委員、谷村委員、辻委員、長場委員、中村(香)委員、中村(美)委員、西田委員、柳井委員、山岸委員、山口委員、山田(初)委員、山田(真)委員、吉田委員 (20名)
欠席者	なし
開催形態	公開(傍聴者3名)
議題	1 令和元年度 第1回市レベル地域ケア会議(資料1及び資料2)
決定事項	1 独居高齢者等への支援について委員から意見を聴取した。

議題(1) 令和元年度 第1回市レベル地域ケア会議

事務局	資料説明 資料1及び資料2 令和元年度第1回市レベル地域ケア会議について
武安委員	プロボノとはあくまでもボランティア活動なのか。それとも報酬が発生するのか。また、高齢者がボランティアする側であってもよいのか。高齢者が高齢者を支援する場面は現場では多いのか。
事務局	プロボノは実費程度の負担は発生するものの、無償のボランティア活動となる。また、高齢者でも元気にボランティア活動をしている方はいる。一例を挙げると、介護予防・生活支援サービス補助事業(サービスB)では担い手として、サロンや配食の支援など要支援者等に対する活動の場面で、高齢者がボランティアとして活躍している。
事務局	65歳以上の第1号被保険者が登録できる「よこはまシニアボランティアポイント」には、約2万人の登録があり、大勢の方がボランティアとして活躍している状況である。
延命委員	検討テーマが「独居高齢者等の支援」ということだが、「8050問題」や「ひきこもり状態の方がいる家庭」といった内容も「等」の中に入れて考えてよいのか。
事務局	昨今、複雑化する独居高齢者の周辺課題も踏まえて、議論していければと思っている。
辻委員	隣近所で誘い合って、ウォーキングや山登りをしている。かつては自治会の事業で、近場への小旅行があったが、自治会役員の負担が大きくなり中止になってしまった。元気な高齢者が参加できる自治会活動がもっとあってもよいと思う。
西田委員	仕事をしたい高齢の男性はたくさんいると思う。高齢の男性に地域の中で力を発揮してもらうことを期待するのであれば、地域活動への参加の動機付けにつながるようなアクションを起こしていけないといけないと思った。
小林委員	独居の男性を外に連れ出すことは難しいことだと感じている。 私の父親は介護認定を受けていない元気な90歳なのだが、「元気な高齢者の行き場がない」という話をよく聞く。高齢になってから子どもの家に転居したような場合、その地域には「昔からの知人」というつながりが少ない。転居してきた高齢者は、地域のサークルにも入りづらい現状があるようだ。

	<p>また、住まいが離れている家族から『怪我をするから余計なところに行くな』と言われていたので、なかなか外に行けない」という独居高齢者の話も聞く。独居高齢者を外へ連れ出してくれるサポーターが、非常に大切なのではないかなと思う。</p>
山田（初）委員	<p>災害時の要援護者支援に自治会で携わっている。民生委員、町内会の新旧役員が見守りサポーターとして要援護者の見守り活動をしているが、訪問時に「外を出歩く自信がない」「なんとなく不安だ」という理由で元気な高齢者が家に閉じこもっている場面にあうことがある。そういった人が自ら外に出てくる場や機会があると良い。</p>
小倉委員	<p>近所付き合いは、人間関係の構築のスタートラインだと思う。</p> <p>様々な事例に関わった中で、「独居」という言葉をひとり暮らしの人はとても嫌うことを感じた。確かに「ひとりぼっちでしょ」「孤独だから外に出てきなさいよ」という言い方をされれば、余計に引きこもりたくなってしまいうだろう。</p> <p>ある時、「私を独居にさせたくなければ、誰かが家の中に遊びに来ればいいじゃないか」と言われたことがあった。「独居高齢者を外へ連れ出すことができなければ、独居高齢者の自宅を交流の場所にする」という、逆転の発想だと思った。</p> <p>外側から引っ張り出すだけではなく、安否確認や人間関係の構築ができて孤立の解消にもつながる環境を、いかに作り人と人がつながることができるかということも、その人の人生観に寄り添う中で考えても良いのではないだろうか。集うことが楽しいと感じる人もいれば、ひとりで過ごすことが好きな人もいる。「連れ出すのではなく中に入っていく」という逆転の発想を持ってその人の人生観やプライドを大事にしながら、独居高齢者支援を考えてみてもよいのではないかなと思った。</p>
山岸委員	<p>旭区の若葉台団地で、長年地域活動に携わっている。地域の活動に各自治会から動員依頼すると、熱心に活動に関わってくれるような現役世代が来てくれることがあり、そのような人に個別に地域活動の担い手になってくれるよう声掛けしている。連合の機関紙で地域活動の担い手を募集しても効果は得られず、個々に声掛けをしている状況。</p> <p>若葉台団地は、もともとは人家がない山畑を開発して一団地になった場所で、住民はみな背中にそれぞれのふるさとを持っている。「子どもたちのふるさとを作ろう」という思いにベクトルが合っていることが、一番大きな地域の力になっている。</p> <p>趣味、スポーツ、文化、かがやきクラブの活動など、何らかのつながりができると、顔見知りが増え「あの人、この前来ていなかったよね」といった見守りにもつながっていく。独居であっても、機会があれば、地域の中で人と触れ合うことはできると思う。</p>
佐藤委員	<p>地域包括支援センター職員として、また生活支援コーディネーターとしても働いているので、このような課題に日々直面している。</p> <p>私の市でも山坂が多く、地域にサロンがあっても外に出てこられないという方がいる。外に出てこられない方の外出を支援するために、認定ドライバーという形で、運転ボランティアしたいと申し出てくれる男性もいるが、車両や保</p>

	<p>険の問題で体制が整わない状況になることがあり、ニーズのある住民、熱い思いのあるボランティアがいる中でのマッチングがうまくいかないもどかしさを感じている。</p> <p>また、私の市でも社会福祉法人が社会貢献の一環で、車両を貸し出して住民に運転してもらって買物ツアーを始めた地域がある。他の地域も追随したいところだが、高齢者が運転ボランティアを希望した場合、高齢ドライバーの免許返納に関わる世論や、事故に対するリスク対応への検討にも慎重にならざるを得ず、思いをつないでいくことの難しさを感じている。</p> <p>地域の中のニーズは公的なサービスだけでは対応できない状況であると、地域住民も分かっているのに、うまく仕組みが作り切れていないところにジレンマを感じている。</p>
柳井委員	<p>対面で人とつながってなくてもインターネットの中ではつながっているような、現代のひきこもり状態にある若者を思うと、インターネットも見守りにおける発信や受け応えのツールだと考える時代が来ているのかもしれない。対面で、「その人をなんとかコミュニティの中に連れ出し人との関りをもたせよう」という発想がメインになっているが、「ひとりでもその人の安否確認ができていけばよいではないか」という発想になれば、様々なツールが使えるのではないかと感じた。</p>
中村（香）委員	<p>検討テーマに絡めて、「8050 問題」について触れたい。区社協にも、8050 問題に関係するような相談があがっていると聞いている。親が顔を見せている間は支援できるが、親から拒否された後の一歩踏み込んだ支援は、行政に対応してもらいたいと思う。</p> <p>プロボノは、専門性を持っている方のボランティア活動ということだが、地域活動の担い手の確保が困難な昨今において、ボランティア活動に手を挙げる人は、かなり意欲があり前向きな人だと思う。しかし、ボランティアする側が、相手に対して押しつけがましくなっているはいけない。ボランティアする側とニーズがある側とのマッチングは難しい。ニーズに合わせたマッチングを行っていかなければならないと思う。プロボノの取組にも期待している。</p>
谷村委員	<p>企業を定年退職した人の過ごし方の一つとして、プロボノの啓発が企業単位で進んでいくと、活動が広がっていくのではないかと思った。退職するときに啓発があると、地域活動に対する発想が広がったり地域の中での自分の居場所を考えるきっかけになったりすると思う。</p>
延命委員	<p>私たちは高齢者というと 70 歳代、80 歳代の人たちをイメージする。60 歳代はその助走期間で、この間にプロボノや社会貢献をしようという意識が育つと良い。特に男性は高齢者になる前段階から意識を耕していかないといけないと思う。</p> <p>社協のあんしんセンターの所長をしており、市民後見人の養成をしているが、企業戦士として働き終えて市民後見人になった男性も多い。民事調停委員もしているが、銀行や保険会社などを定年退職してから調停委員になる人もいる。民事調停委員は 70 歳が定年なのだが、彼らはとても元気でやる気に溢れている。60 歳代の会社を辞める頃に、「定年退職後の過ごし方として何かないか」と手探りで探し、市民後見人や民事調停委員に辿り着いた人たちを見ると、この</p>

	あたりの年代の人をいかに社会参加につなぐかが、大切だと思う。
柳井委員	定年退職の年齢、年金の問題など、働き方に対する情報が不確かで今後どのような社会情勢になっていくか分からない中で、定年後の過ごし方を悩んでいる人が多い現状があると思う。お金がない中で生きがいをどう求めているのかの整理は、非常に難しい状況だと感じている。
大竹委員	民生委員として地域見守り推進事業に携わっている。地域のサロンなどの活動に男性の参加は少なく、どうすれば参加してもらえるのかと考えている。声掛けをしても、なかなか参加につながらない。 また、いわゆる「ごみ屋敷」が社会問題になっているが、独居の男性宅で、どこで寝ているのかと思うような状態に遭遇することもある。 サロンやたまり場のような居場所よりは、職業経験を活かしたボランティア活動の方が男性には向いているのではないかと思った。